

思いは弱まることなく

——ヘンリー・ヴォーン 『甦ったタレイア』の世界

森 田 孟

ヘンリー・ヴォーン (Henry Vaughan, 1621-95) の『火花散る燧石』*Silex Scintillans* (1655) ——以後、本稿では『燧石』と略記——、その「補遺と増幅」〔本稿筆者の見解〕となった『甦ったタレイア』*Thalia Rediviva* (1678) は、ヴォーンの遠縁に当るとされる第三代ウスター侯爵兼第七代伯爵ヘンリー・サマセット (Lord Marquis and Earl of Worcester, Henry Somerset) に献呈されている。この冒頭の献辞と、それに続く「読者へ」の筆者は、前者は「J・W」、後者は「I・W」と署名されるのみだが、当時、IとJは互換可能な綴りであり、同一人物で、ハッチンソン「H・二二五」もマーティン「M・七五六」も、ジョン・ウィリアムズ (John Williams) だと推測している。

彼は三十歳になった一六七八年に聖ダヴィデ教会の主教座聖堂名誉参事会員 (Prebendary) になり、一六八〇年にはウエルズ南西部の都市カーディガン (Cardigan) の大執事 (Archdeacon) になっている。『甦ったタレイア』は、この彼が編集して出版された、ヴォーン最後の詩集であった。その後半に、「敬虔な想いと不意の叫び」の見出しの許に収録されている十九篇の中の十二篇 (初めの十篇と、それから六篇を飛ばしてからの二篇) を、前号で取り上げた。今回は残りの七篇を、まず、十一番目の作品から順に見てみよう。

キリストの降誕 The Nativity

一六五六年の作

平和？ それとも全ての世界に？ 確かに、一人にして
彼 あの平和の王子には、それはない。

彼は生れるために旅をして、それから
生れて再び更にもっと旅をする。

哀れなガリラヤよ！ 汝は彼の〈降誕〉に
相応しい場所には、とてもなれない。

不安におののく彼の母は、呼び出しは受けても
解放されることはない、彼女が支払うまでは。

〈税金〉を？ そうなのだよはり！ 我らには見える、
〈教会〉が彼女の悲惨をよそに栄えるのが、

そしてベツレヘムでの彼女がそうだったように、頭をもた
げるのが、

彼女が諸々の苦難に打ち拉がれて横たわる時というのに。
もたげる？ あらゆるものが倒れるにしても我らは彼ほどの
窮地に陥ることはあり得ないのだ。

受難の大きいなる〈典型〉だ！ 何がやって来ようと
あなたの悲しみは、如何なる類似のものにも今も増さって

いる。

あなたは天上から地上へおいでになる、我らが
〈大地〉から〈天国〉へあなたと共に行くようにと。

そしてここでは全く歓迎されなかったのに
我らに彼方で住む所をお与え下さったのだ。

馬小屋があなたの〈宮殿〉だった、それで

人間が獣に変わる時、〈獣〉は〈人間〉になることだろう。
彼らはあなたの〈廷臣〉だった、他の者たちは違った。

彼らの粗末な〈秣桶〉があなたの〈王冠〉だった。
産着の絹などあなたの〈手足〉は纏わなかった、

尤もあなたなら自らの〈光線〉を黄金に変えられたであろ
うが。

あなたが生れた時、〈揺すり手たち〉は侍らなかつたし
〈揺り籠〉は揺れなかつた、浮かれ騒ぐ歌もなかつたが

彼女の純潔な〈膝〉と神聖な〈胸〉とが
あなたを最初に抱え入れて、安息を与えたのだった。

しかし留まって下さい、どのような光なのですか
流れてきてここに金ぴかの輝きとなって落ちるのは？

あなたの〈星〉なのだ、小姓を走らせ、あなたに
服従する〈東方の王たち〉を連れてくるのは。

〈主〉よ！ 何か〈光〉を我らにお与え下さい、我らが
彼らと共にあなたへ到る道を見つけられるように。
御覧下さい。どのような霧が昼間を覆い隠すのかを、
その時の暗いことといたたら！〈光線〉を一条降り注いで
我らをこの悲しい夜から導き出して
もう一度おっしゃって下さい、〈光〉あれかし⁽¹⁰⁾と。

[M・六六五—六六六]

訳注

- (1) the prince of peace 「イザヤ書」9・6 「みどりごが一人私たちに生れた…彼の名は〈驚くべき指導者〉〈強力な神〉〈永遠の父〉〈平和の王子〉」から [R・A・六八三]
- (2) travels = travails [F・四二二]
「ヴォーンは 'travel' 「旅をする」と 'travail' 「産みの苦しみを味わう」との掛け言葉を楽しんでいる [R・A・六八三]
- (3) Galile 古代ローマの属領で、キリストの宗教活動の主な舞台となった地。
- (4) A Tax? 'tis so still ヴォーンは二六五五年に王党派の人々に課された「十分の一収入税」'Decimation Tax' におそらく言及している。この税金は一六五六年にはもっと低い収入にも課されるようになった。(Gardner, *Commonwealth and Protectorate Supplement*, p.1) [M・七四〇]
- (5) Type = archetype [R・六八三]
- (6) mansions 「ヨハネによる福音書」14・2 「私の〈父〉の家には住む所 (mansions) が沢山ある」。「森」[小考(二) 48] 「三行目にも同じ語が出てくる『住まい』と拙訳した」。こういう場合の 'mansion' の意味は「大きな家屋の中の個々の一間もしくは一世帯分の住み処」(*OED* mansion 2b) [R・A・六〇七、六八三]
- (7) A stable was thy Court サウスウェル [Robert Southwell, 1561-95. 英国のカトリック詩人、ローマ・カトリックの殉教者] の「この馬小屋は〈王子〉の宮殿である」(「新王子、新たな華麗」17) と比較せよ [R・A・六八三]
- (8) Rays ライトは 'rays' 「襤褸」に校訂する [LH・二八七]。おそらく正しいだろうが、その校訂は、にも拘らず受け入れ難い。*OED* ray sb⁴1 は、次のように記録する、即ち、この語は一六〇七年までには明らかに廢語になっていたが、その年にその語は「決して色づけられたり染められたりしていない布の属性を指している」と注記されている。この一行の意味は、キリストには自らの粗末な産着を単に黄金色ではなく黄金そのものに変えられただろう、というものだろう [R・A・六八三—一八四]
- (9) Rockers = Nurses or Attendants 「乳母」もしくは「付き添い」 「揺り籠の中の子供を揺する義務を負った」(*OED* がここを引用している) [R・A・六八四]

(10) *Let there be Light* 「創世記」 1・3 「神が光あれかしと
言われると光が生じた」 「同」

国の、社会の現状は、「霧が昼間を覆い隠す」「暗い」「悲しい夜」だという認識から、その現状を刷新しようとする教会への非難、批判が通奏低音であるのは、『燧石』の世界と変らない。ヴォーンにはそれを何とか打開したいという止むに止まらない痛切な希いがあり、それを「彼」から「あなた」へと人稱を身近にさりげなく変えながらキリストに、そして愛の権化であるその母に托そうとする。キリストの生誕時に思いを馳せて、それを絵に描いたような作品である。

二六行目の「光線」について訳注(8)で紹介したように、ラDRAMは、ライトの「檻樓」への改訂を、「おそろく正しいだろうがにも拘らず受け入れ難い」などとまるで日本人みたいな遠慮した曖昧な見解を表明していて、筆者を苦笑させたが、「ライトは明らかに正しくなく、従って当然容認できない」と言えばよかったのだ。

校訂というのは、たとえ意味不明と思われる語句や箇所があるうと、直ちにそれを何らかの印刷上の誤りだとか、

ましてや作者の誤記か思いがいかなど見定めて、常識や常識で納得できる改訂をするなら、それは校訂者のとんでもない僭越であること、とつきの昔の常識であろう。大體、「常識」や「良識」を〈越えた〉所に、価値を包含し且つまた発現する文芸作品は成り立つのである。

これまでも何回か、ヴォーン作品の語句の不当な、あるいは滑稽な改訂の例に触れてきた。つい前号拙稿「続小考(二) 27-28」でも文脈から(さへ成立しないのだが)為された「騾馬」*mule*の「土竜」*mole*への改訂の不可に言及したばかりである。「彼の子宮」の「彼」を、子宮は男性にはないのだからと「彼女」に改訂した「イサクの結婚」の中の滑稽な例——実は「彼の妻」を意味する提喻と解すべきもの——「小考(四) 3-6」もあった。

今問題にしているあの一行は、キリストならあのように粗末な産着を纏っていても、自らの裡なる天与の〈光線〉を目に見え手に触れられる黄金そのものに変えられるだろう、という少しも無理のない意味になるだろう。同時にその途端、黄金に変えうる〈光線〉を裡に持つ人ででもなければ打開できないような現状だという悲観の聲が、この詩から聞こえてくる。

次に、「キリストの降誕」を祝う「クリスマス」の真の姿はどうあるべきかが問われる二八行の作品が、同じ八音節詩行二行連句の詩型で続く。

真物のクリスマス⁽¹⁾ The true Christmas

だから〈木蔭〉と〈月桂樹⁽²⁾〉にしがみついて
異教徒のやり方を取り戻そう。

尤もこの偉大な日は その事を否定するのだが、
〈緑〉は君に春を思い出させるだろう、

そして〈大地〉と、君の激しい〈お祭騒ぎ〉以外の全てと
解放された〈大広間〉に屈辱を与えるのだが。

もし君が〈花々〉を身に纏い、〈薔薇〉をばら撒き
自分の胸の上で暖い〈雪〉を赤く染められるなら

まさにその衣服そのものを君の陽気さは
非難し、〈病氣〉になると萎れることだろう。

今日の輝きは〈音楽〉〈仮面劇〉 あるいは
〈見世物〉のお陰でもなければ

豪華な設備や〈料理〉のせいでもなくて
あの〈秣桶〉の粗末な〈状態〉のお陰なのだ。

彼の この世での生活は 誕生と同じく

壮麗と浮かれ騒ぎとへの抑制に他ならなかった、
それであらゆる人間の偉大さも 彼の謙遜によって
咎められているのが 君には判ることだろう。

だから君の開け放った家と騒音に

彼を迎え入れよう 神聖な〈喜び〉を感じながら、

哀れな〈羊飼い〉の用心深さを發揮しながら、
そういう彼を〈天国〉からの光と讚美歌が祝福したのだ。

君が豊富に持つものを広く投げ与えよう
欲しがっており しかも君の荷を軽くしてくれる人々に。

こうして中身を空にする人は更に多くを取り込むだろう
だが 放縦は損失であり〈罪⁽⁵⁾〉である。

眼に見えないでやって来るものを美しく着飾らせよう、
そうすれば君は君の〈クリスマス〉を護れるのだ適切に。

〔M・六六六―六七〕

訳注

(1) おそらくこの詩は直前の作品と同じ頃「一六五六年」に
書かれただろう、「H・二二八」参照〔M・七六〇〕

(2) *Ivie and the Bays* 異教の祭儀への連想。初期の教会は

サトウルナリア祭「農神サトウルヌスを祭り、古代ローマでの十二月中旬に数日間にわたって行われた収穫祭・冬至祭―クリスマススの起源とも言われる」と結びついた異教の慣習が浸入するのを絶えず防いでいた「R・A・六八四」

(3) *house and noise* = noisy house「騒々しい家」(二詞一意)。

(4) *What you abound with..more in*「伝道の書」11・1「あなたのパンを水の上に放り投げるがよい、多くの月日の後にそれを見つげ出さだろろうから」「R・A・六八四」

(5) *What comes not in sight* = the inner man, the soul「内部の人、魂」「F・四二四」

クリスマススを祝うことを清教徒の共和制政体は禁じていた。現在の政府の方針に、王党派の立場を堅守する作者は当然反対である。が、そこは何しろヴォーンのこと、クリスマススも唯、元に戻すだけでなく、「異教徒のやり方を取り戻す」ことで新たな真の姿にして「適切に」*right*(この詩の最後の一語) 祝えるようにしたい。だから、この作品は、「だから」(So) でいきなり始まる。

「こうして中身を空にする人は、更に多くを取り込むだろう」*Who empties thus, will bring more in.*とは、如何

にもまるでキリストの口調ではないか。しかし、だが、と直ぐ続けるところがヴォーンなのである。「だが 放縦は損失であり(罪)である」*But riot is both loss and Sin.*と。

音楽、仮面劇、見世物への言及は、護国卿クロムウエルの政治の後年に向けられたものだが、舞台劇と仮面劇は議会在が禁止していたにも拘らず、シャーリーの仮面劇「キユーピッドと死」は一六五三年にポルトガル大使に披露されたし、一六五六年一月二二日にはダヴナントが有名な自作の娯楽物で一種のオペラの改作をラトランド劇場で、護国卿の黙認で公開した「H・二二八」。

続いて、神への「懇請」三四行が現れる。

懇請 The Request

おお あなた⁽¹⁾ 私に拒んだ方^{かた}、

この世が崇める至福と

あらゆる大きな避け難い欲望とを、

愚か者が罪深い(ダスト)の塵^{ダスト}の中にあるのを褒め讃えて

あの巧妙で狡猾なひねり⁽²⁾でそれらの

不愉快な慰懃ぶりを束ねようとするとするあのものらを、
私の弱い〈眼〉をいつも あなたのものではない
あの華美な事どもの輝きから遠ざけて下さい、⁽³⁾

そして私の〈耳〉は 邪悪な、しかし拍手喝采される
〈喜び〉の騒音には閉ざして下さい。

何しろあなたはどの土地でも あなたの貧民のために
多くの陰や〈隠れ場〉を用意なさるのだから、
そこでは彼らは 暴風雨は無論

慌ただしい塵や熱から 身を引くことが出来るだろう。

〈岩〉、もしくは〈繁み〉は、綿毛の詰った寢床になる、
その頭上に あなたがそこで 秘かな

祝福の冠を載せるなら、あるいは

〈聖霊〉の燃え立つ火から成る〈頭飾り〉を被せるなら。
そしてあなたの善意が 怒りの衣裳を

纏ったまま 祝福するとはみえなくても、
それでもあなたが 降れば全てを再び

清らかにするあの豊かな〈雨〉を与えて下さるなら。⁽⁵⁾

おお どのような類の〈訪問〉が毎日行き交ったことか
偉大なあなた御自身と誠に哀れな草との間を、
どのような優しい表情であなたの愛は輝くことか

あなたのあの低い〈スマイル〉の上で！⁽⁸⁾
背の高い〈チューリップ〉が呪われて、
〈ヨウラクユリ〉が渴きのせいで死滅する間に。

おお 私にいつもお与え下さい あゝ密かな食べ物を⁽¹¹⁾

あの貴重な〈食事〉を、あなたの愛が分け与えるあれを！
私にお与え下さい あの〈喜び〉を、誰にも損えず⁽¹²⁾

どのような悲しみに遭っても和らげてくれるのだから。
これがあなたの〈子供〉が乞い願う分け前であり、
鏝の一部ではなく、襤褸や澱でもないのです。

[M・六六七—六八]

訳注

(1) O thou! who 底本 [M]。O Thou! who [F・四二四] /

O THOU who [LH・二八九] このテキストは全体が原典
に忠実ではない。「RA」は底本どおり。但しこのテクス
トは綴りを現代風に改め、固有名詞以外の大文字で始めら
れる語彙を全て通常の小文字で始めるように改めている。

(2) With those fine, subtle twists... gallantry G・ハーバート

「真珠」"The Pearl" [一〇行詩四連の作、WIL・三二〇
—二七] 一六—一七行目「それをこの世に真心結びが結び
つけ／束ねるのだ、それがどこへ行くこと」と較べよ

「RA・六八四」。尚、この「真心結び」 a true-love-knot¹とは「愛の結び目」とも呼ばれる複雑な装飾「蝶」結びの一種で、二個の入り組んだ結び輪を持つ二重の解けることのない結び方。堅い愛の象徴。

(3) Keep still...Eyes from the shine 「詩篇」119・37「虚しいものを見ないように私の目を逸らさせて下さい、あなたの道に従うことで蘇らせて下さる」参照「M・七六〇」

(4) a Fire/Made of the Comforter's live-fire 五旬祭の日に弟子たちの上に貼りついたような火の冠、もしくは頭飾り「F・四二五」

「使徒言行録」2・3「そして炎のような舌が分かれ分かれに現れて各々の上に留まった」、及び、ヴォーン自身の作品「白く日曜日」【小考(十)15】の第二連、「この大きな祝祭に〈使徒の面々〉に／襲いかかったあの炎と、二分れに裂けた／〈舌〉付きの頭飾りを着けた一面毛羽立った彼らの頭、／それを〈預言の〉火の冠で飾ったあの炎」参照「RA・六八四」

(5) rich Rain...clears all again 「申命記」32・2「私の教えは雨のように降り注ぎ、私の言葉は露のように滴る、若草の上に降る小雨のように、青葉の上に降り注ぐ夕立のように」参照「F・四二五」

(6) thy great self 「蜜蜂」【続小考(一)——本誌前号44】七五行目に同じ句がある「偉大な御身御自身」と拙訳

「M・七六〇」

(7) such poor grass 「イザヤ書」40・6「肉なるものは全て草であり、その上等なものも全て野の花のようなもの」参照「RA・六八四」

(8) Violets 伝統上、花々の中でも最も慎しく質素なもの【同】

(9) the tall Tulip is accurst チューリップは太陽が沈むと萎れると信じられていた。カメラリウス「象徴と表象の世紀」(Camerarius' Symbolorum et Emblematum...: Conturna Una, 1590) No.88. 「私は太陽が隠れると凋む」参照【同】

(10) Crowns Imperial G・ハーバート「平和」“Peace”六行詩七連の詩、WIL・四三七—四一」の一三—一五行目「それから私はとある庭に入ってゆき見つけた／粹な花／ヨウラクユリを」と較べよ「RA・六八五」字義どおりに「皇帝の冠」。「粹な花」A gallant flower」と言い換えられている。尚、ヴォーンの詩【記六】私は先日歩いて「小考(九)11—13】の三行目「粹な花」と訳注(2)参照。(11) secret meals 「樹液」【小考(十一)49—51】の一四行目「君に密かな食事を馳走するのだ」と比較せよ「RA・六八五」

(12) rust and rags 「マタイによる福音書」6・19「あなたは地上に富を積んではならない、そこでは虫や錆が腐ら

せる」〔同〕

「私」に世の卑俗を悉く拒んで下さった神に「あなた」と親しく呼び掛けて、如何なる悲しみにも何とか耐えられる身にしてくれるようにと、「あなたの〈子供〉である」「私」が「懇請」する詩。一読何かしゅんと読者（キリスト教徒であるか否かに関係なく）の襟を正さしめる作品ではあるまいか。

これも前二作同様の八音節詩行二行連句の詩型である。次にラテン語の詩が三篇並んでいる。筆者にはそれらをそのまま邦訳する能力がない。しかしだからと言って看過すれば、詩集の重要な流れを無視することになる。幸いにも、フォウゲル〔F・四二六―二九〕とラドラム〔R・A・三七六―七八〕が各々別箇に、と言つても後進の後者は前者を参照しているだろうが、それぞれ優れた（ということ）は筆者にも判る）英語の散文訳を添えてくれている。

両者を見較べてみると、ラドラムの方が最小限ではあるが説明が適宜付加されていて多少分かりやすくなっているように思われるのでそれには拠らず、無論それを十分に比較参照しながら、フォウゲルの英訳を拙訳することにする。

キリストへの「懇請」に直統するからであろう、キリストが洗礼を受けたヨルダン川が主題の作品が最初に来る。二十行のラテン語の詩である。

エルダン川⁽¹⁾ Jordanis

何故歌うのか 黄金の波のことを、金泥で燃え輝く川々を
塩辛い海の底に天界が振り撒く宝石のことを？

もし太陽が引き潮の波間で唯 夜を過ごすだけでなく
永遠の眠りにつこうとしたなら、あるいは明るく輝く星々が降りてきて テーテュース⁽²⁾のもやもやした領域に住もうとしたなら これらはどのような宝石を作っただろうか！
しかし私には 依然として海に何か価値があるとは思えなかつたし アラビアの海岸の東洋の富は依然として単なる層のようにしかみえなかつただろう。私なら出来るだろう
パクトーロス川⁽⁴⁾の粗末な砂とタホ川⁽⁵⁾全体を私の水の僅かな唯の一滴で豊かなものにするが。おお 貴重な泉！
おお あの清らかな毛髪に注がれた水よ！わが〈主〉の神聖な浴槽よ！ 〈彼の方〉が君に幸運せうな川を進んで
恵んで下さったのは 君の栄光の極くささやかな一部に

すぎなかつたのだ。川水を滴らせながら（彼の方）はヨルダン川の真中で水浴びをして、その神聖な口で君の流れを祝福されたのだ。ああ、惨めなエルサレムよ、

汚れた流水に取り囲まれて！ ベテスタの池の入口はその天使を失ってしまった。今や東方と背教のバルパル⁽⁸⁾の水は奔流となり、泥で濁ったアバナ川は水流を汚染されたまま流れてゆく、異教の川々が君を汚してしまったのでヨルダン川だけが、今なおキリスト教の水である。

〔M・六六八〕

訳注

- (1) G・ハーバートのこの標題の詩二篇「五行詩三連の作品」と六行詩三連の作品、W i l・一九七―二〇三及び三六五―一七二」が、固有の主題と宗教詩に相応しい扱いに対処している〔RA・六八五〕
- (2) Tehys ギリシャ神話、ティーターン神族の女神、ウーラノスとガイアとの娘で、海神オーケアノスの姉妹であり妻。海のニンフ、オーケアニデスや川の神を産んだ〔同〕
- (3) ローマ人にとつての東方は、途方もない富の地域であり、特に紅海の一帯は香料と宝石の源として有名だった〔同〕
- (4) Pactolus 小アジアの古代リュウディアにあった小川。

その砂洲から金が採れたので名高い。リュウディア国最後の王 (560-480) クロイソス (Croesus) は大金持の譬喩に用いられる。ギリシャ神話では、全てを黄金に変える力を持つミダース王 (Midas) が身を清めたのでこの川から金が採れるようになったとされる。この詩の冒頭の「黄金の波」云々は、このことに言及〔同〕

- (5) Tarsus スペイン中部を西流しポルトガルを通ってリスボンで大西洋に注ぐイベリア半島最大の川で、長さ九一〇km、スペイン語名「Tago」ポルトガル語で「Tago」砂金で知られていた。

- (6) ここからの六行ほどは「マタイによる福音書」3・13-17で語られるように、ヨルダン川でヨハネによつてキリストが洗礼を受けることに言及〔RA・六八五〕

- (7) Bethesda エルサレムの病気を治す霊泉。「ヨハネによる福音書」5・2-4「エルサレムには羊市場の傍らにへブライ語で「ベテスタ」と呼ばれる池があり…主の御使いが、ある季節には池に降りてきて水を乱した、水が動いた時真先に水に足を踏み入れた者は如何なる病にかかつていても癒された」〔同〕

- (8) Pharpar: Abana 「列王記」下5・12「イスラエルのどの流れの水よりもダマスカスの川アバナやバルパルの方が良いのではないか」。ヨルダン川で洗うことでナアマンのライ病が癒える話は「列王記」下1-19で詳説される。ヴ

オーンは聖地の地理には些か曖昧だ〔同〕

今なお唯一のキリスト教の水だとヨルダン川を讃えた詩に続くのは、重要な国王殺しの一件への謎めいた言及がある八行のラテン語詩で、チャールズ王の処刑か、国王殺人者の一人の死かの直後に書かれたものか、とハッチンソンの推測する「H・二二八」次の一篇。

セルウィリウスの運命即ち神の復讐

Servilius Fatum, sive Vindicta divina

リュートの音楽⁽²⁾同様 人生が甘美であっても 我々の
避け難い悲しみの辛さは威力を振るう。何と突然素早く
基礎の大地は報復の抱擁で 軽蔑と凄まじい形相で一たび
歪められたあの目鼻立ちを押しつぶすことか。もしも
スマイレと芳しいクロッカスと洞み知らずの百合とが
正義の人々の亡骸から芽生えるものなら この墓からは
野イバラ アザミ 不毛の野生カラスムギの どれ程もの
すごい生長が見られることだろうか？ 御身ら神々よ、
揺らぐことなく強く信頼して下さい 有害な星々の下に長

く留まる宿命を負った心正しい人々を！ かくして雲は
次々通り過ぎてしまおうと天上へと更に明るく昇ってゆき
各々の最後の日には 甚だ多くの星座同様に衰えることだ
ろう。時間は飛び去ってゆき、死ぬべき死を二つ所持する
人間は 闇の中に沈んでゆくことだろう 肉体となって生
きていた時のように⁽⁴⁾。

〔M・六六八—六九〕

訳注

- (1) E・K・チェインバース (Chambers) は示唆している
〔*The Athenaeum*, March 29, 1902, p.403〕 標題のセルウィ
リウスは、ユリウス・カエサル暗殺者の一人、P. Servilius
Caecaであり、それによって仄めかされている十七世紀の
人物はブラッドショーかアイルトン (Bradshaw or Ireton)
であり、ギニー嬢 (Miss L. I. Guiney) が「アシーニア
ム」誌の同じ号(「クロムウエルとヘンリー・ヴォーン」
四〇二—三頁)で「セルウィリウスの仮面の下に見える」
と主張しているようなクロムウエルではないと「H・二二
八—一九」〔F・四二七〕／セルウィリウスという名は、
底意のあるヴォーンの意に適合していた「RA・六八六」
(2) リュート (lute) 「梨型の胴と長いフレット付き指板を

持つ撥弦楽器で一六一七世紀に流行した」の音楽は、その憂愁と甘美さが特色とされている。「RA・同」

- (3) E・K・チェインバースは、シャーリーの「正義の人々の行為だけが／その埃の中で甘やかに匂い、花開く」(Shirley's 'The glories of our blood and state' 23-4) と比較してゐる [同]

- (4) ハッチンソンは、ヴォーンが英訳したポエーティウスの詩 (II.vii. 21-4) 「M・八四」にある「君は第二の死に耐えなければならぬ」と比較している「H・二一八」。もしこの比較が適切だとすると、ヴォーンは、このかつて悪名高かった人物「ポエーティウス」に振りかかることになる全く不可解な「第二の死」に言及しているのであり、ヴォーン自身、セルウィリウスが誰のことか確かな手掛りを後世に残さなかったことよってそれを確認するのを助けたわけだ。それはともかく、ヴォーンは「ヨハネの黙示録」21・8の「第二の死」を念頭においているのかも知れない。「しかし臆病な者、不信仰な者、忌まわしい者、人を殺す者、淫らな行いをする者、魔術を使う者、偶像を拜む者、全て嘘をつく者、このような者たちへの報いは、火と硫黄の燃える池である。それが第二の死だ」

かつて華やかだった人々には「二番目の死」が待っている

ると述べているポエーティウスの詩を反響させながら、チャールズ王に死刑を宣告した人々への神の審判を予言する詩だと、ハッチンソンは観る「H・二一八」

訳注 (1) にあるアイルトン将軍 (General Ireton) は、一六五一年一月二六日に死去して、ウエストミンスター大寺院で国葬にされた。ブラッドショー (Bradshaw) は、国王を裁いた議会委員会議長で、王の死刑執行令状の筆頭署名者、一六五九年一〇月三二日に他界、ウエストミンスター大寺院に埋葬されたが、王政復古(二六六〇年)後、前述のアイルトン、及びクロムウェル共々、その遺体は掘り出された「H・二一九」。

もう一篇ラテン語の十二行の詩が続く。あの、二十一世紀の現在も尚、美しい！の一語に尽きるアスク川 (The Usk) で、自分が擬餌で捕ってきた鮭を、長年の年長の友人に贈呈するのに添えた趣の短詩である。

鮭について De Salmona

この上なく高潔な郷士にして彼の特別な友 神学博士

カントレフのトマス・パウエル氏に ⁽¹⁾ Ad virum

optimum, & sibi familiaris notum : D. Thomam Peel-

この鮭を受取られたし。水底から水面に　しゃにむに
上つてきた時激しく襲いかかった築の上で捕獲されたもの。
見かけは昆虫の　中身のない美しさが　彼の破滅だった。
彼にはそれと分る色で染められた羽毛で出来た蠅、それを
捕えて彼は捕えられた。全く何も気付かないでそれを呑み
こみ　自らが呑みこまれる運命となった。不運な餌を強奪
して　彼もまたおいしい強奪品になる。至福の平和！
この哀れな生命というこの上なく富める賞品！　いくらで
も安全に彼は鎮まり返った水溜りに潜んでいられたものを。
それなのに泡立つ急流の轟きや呻りの中を捜し求めていて
彼は忽ち私の釣針の餌に屈するのだ。このような遊びの
瑣事が　重大事を象徴するとは何と感銘深いことか！
築がこの世界であり、あの鮭が人間、あの羽毛は、
欺瞞なのだ。

〔M・六六九〕

訳注

(1) 後出(ヴォーンへの献呈詩の訳注(8)参照)の、ヴ

オーンの友人。ヴォーンが彼に献じた詩は、他に次の四篇
ある。「吾が学識高き友T・パウエル氏に、そのマルヴェ
ツイ著『キリスト教徒政治家』の翻訳が成ったに際して」
四二行、「アスタの白鳥」所収「M・六〇一—六一」／「こ
の上なく学識の高いトマス・パウエルに、彼の光学の基本
要素論について」ラテン語の詩一〇行、同「M・九三」／
「吾が学識高き友にして義理堅い囚人仲間、カントレフの
トマス・パウエル神学博士に」四八行、本詩集に収録
「M・六二三—二四」／「煩わしい運命、カントレフのパ
ウエル博士に向けて書かれた」一一〇行、同「M・六三四
—三七」

如何にもこの作者ならではの軽妙で機智に富んだ、単な
る機会詩の枠を越えた含蓄豊かな、作者の人生が滲み出し
ているような秀作だと、筆者には思われる。

餌を捕えて捕えられ、それを呑み込むことで自分が呑み
込まれ、強奪することで強奪される運命!…これは正に人
間の、歴史の、世界の、凝縮図ではないか。「遊びの瑣事
が重大事の象徴」であることは、我々のしばしば実感する
ところ、この掌篇詩自体が、「世界」——ヴォーンが『燧
石』とこの詩集『甦ったタレイア』とに各々一篇収録した

名作（既に紹介済み）の標題でもある——の象徴になつて
いるだろう。この「鮭」は、ヴォーン自身だった。

*

以上の六篇が、本誌前号で扱った「回復」「続小考（二）
36-38」に直続する作品である。そして前号の最後に掲載
済みの長篇二篇「同38-47」が並んだ後に現れるのが次の四
四行の詩である。

キリスト教徒の宗教に To Christian Religion

さらば 汝いつも哀れな意気地のない（選ばれた者たち⁽¹⁾）
の 紛れもない確かな（元氣の回復）よ

さらば 〈魂〉の〈喜び〉よ、〈霊〉が

活気づける健康とその密かな富よ！

さらば 我が〈明けの明星〉⁽²⁾よ、真物の

〈光〉の明るい夜明けの表情よ！

おお 尊く光り輝く者よ！教えて下さい、どこへ

御身は行ってしまうのか、夜がこちらを訪れる時。

〈見者〉⁽³⁾は御身の〈運行〉の際中を

観察しながら〈罪〉が育つていくのを凝視めて

自らの〈審判〉を下して予言してきたのだった
御身の〈運行〉はここから〈西方へ〉向かうだろう
そして昼間が我らに現れると

そこに落ち着いて輝くのだ 栄光に満ちた〈太陽〉がと。

おお 嫌われている陰と闇よ！ お前たちが

ここで再び〈支配力〉を得て

不健康な霧⁽⁴⁾のようにあの光を

阻止し、善良なものを悉く損なつた時

誰がああ幸せな羊飼いたちになつて

〈真理〉に明るく輝く次の世代の

〈キリストの誕生〉を、見詰めて、戻ってきて

昇りゆく日へと進んでゆくのか？

おお！ 我らの至福を取り戻して下さるのはいつの年か？

〈神〉がこれを果される時、誰が生き続けられるのか？⁽⁵⁾

汝 〈時代〉の〈岩〉⁽⁶⁾よ、あらゆるものの

〈休息〉よ、汝のために圧迫されるなんて！

降ろして下さい 御身の真実の〈霊〉を、

御身の〈伴侶〉⁽⁶⁾の優しい〈若者〉にして

最初に成長した者たちが小さな一つの頭から

世界中に振り撒いたあの〈霊〉を！

それから もし血を流すまで我らが抵抗しなければなら
ないなら

御身の穏やかな〈鳩〉と我らの高位の〈聖職者〉に
我らが〈十字架〉を担って自らの〈冠〉を救う手助けをさ
せて下さい、人間が不誠実だと判ったり顔を擧める時は。

おお！ 御身を褒め讃える人々を褒め讃えよう！

〈幼子たち〉に〈敵〉を宥めさせよう⁽⁹⁾。そして
生れて日も浅い〈乳飲み子〉に 彼の人の死によつて⁽¹⁰⁾

御身への賞讃を完璧なものにするよう 教えよう！

何ものにも御身が結婚した人を冒瀆させはしないし
彼女の頭から花冠を挽ぎ取らせることもなく

貞節で陽気なまま彼女を死なせて

〈花婿〉の〈眼〉には貴く映らせておこう！

そうすれば 御身には栄光となり彼女には賞讃となる

こういう最後は 彼女のこの上なく明るい日々になる筈だ。

「ヨハネの黙示録」最終章第十七節

「霊」と花嫁とが言う、「来て下さい」と。

[M・六七四―七五]

訳注

(1) Election = The body of the elect [F・四三六] / those
chosen by God. OED election 3b. 「ローマの信徒への手
紙」11・7「イスラエルは求めているものを得ないで選ば
れた者がそれを得て、他の者は目隠しされていたのです」
参照 [RA・六八九]

(2) my Morning-star 「ヨハネの黙示録」22・16「私イエス
は…ダヴィデの朝星、その一族、輝く明けの明星である」を
参照 [同]

(3) A Seer ハッチンソンは指摘する、ヴォーンは以下の数
行でこの宗教の西方への進展を辿っているG・ハーバート
の「教会の闘士」"The Church Militant" [全二七九行の大
作、WIL・六七二]に言及している。罪と闇に追われて
遂には「アメリカ燃り糸」(二二六行目)へと向かい、結
局はその発祥地である東方の審判の地に到るのだと。ヴ
ォーンは「オリーブ山」でもこの詩に言及している [M・
七二七] [F・四三六] [RA・六八九]

(4) unwholsome fogs 「英国教会」[小考(四)7-8]の二
行目「こういう事態がその霧と影を生み出す間」参照。

(5) who shall live, when God doth this? 「民教記」24・23の
後半そのまま [F・四三七] / 「マラキ書」3・2「だが
彼の来る日に誰が身を支えうるか、彼の現れる時誰が堪え
うるか」参照 [RA・六八九]

- (6) thy Spouse = the Church 教会を指す [同]
- (7) to blood we must resist 「くブライ人への手紙」12・4
「あなた方はまだ罪と戦って血を流すまで抵抗したことが
ありません」参照 [同]
- (8) bear the Cross, and save our Crowns 「ルカによる福音
書」14・27 「自分の十字架を背負ってついて来る者でなけ
れば 誰も私の弟子ではありえない」参照 [同]
- (9) Make Babes to still the Enemy 「詩篇」8・2 「幼子、
乳飲み子 (babes and sucklings) の口によって御身は敵ゆ
えに力を持つよう定められたのです、敵と報復者を鎮めら
れるように」参照 [同] / 「マタイによる福音書」21・16
「幼子や乳飲み子 (babes and sucklings) の口にあなたは
讚美を歌わせた」も。
- (10) And teach an Infant...thy praise 無辜聖嬰兒の記念日
「幼子の日」Holy Innocents' Day 「クロデ王の命令による
ベッレヘムの男児虐殺記念日、十二月二八日」のための一
六六一年以前の特禱「全能なる神よ、この日無辜なる幼子
が御身の証人が、語ることはなく死ぬことで御身への賞
讃を告白し示したのでした」を参照 [RA・六八九]
- (11) 彼女に教会にキリスト教徒の宗教に真のキリスト教。尚、
岩などに譬えて「汝」と呼び掛けられるが、拙訳でのその
「汝」も「御身」も原文は全て、thou でキリストを指す。

この詩の直前の「蜜蜂」[続小考(一)42-48]には、「空
想と何か〈芸術家〉の道具類とは／愚か者のための〈宗
教〉を形造るのだ」(六一―六二行目)、「見せて下さい／御
身が抱かれていた国外追放〈宗教〉」(九九―一〇〇行目)と
あった。そしてその力作は「私は家へと飛んで行き、御身
と共に巣箱に入れそうだ」と結ばれていた。キリスト、神
と共に入ることの出来る〈巣箱〉となる真のキリスト教の
出現、それがヴォーンの熱い希いなのである。この詩と
「蜜蜂」は、ハッチンソンの言明どおり「H・二一九」明
らかに〈教会〉の回復以前に書かれたものだと、その内
容が語っている。

この詩(冒頭二行と八、一一行目は九音節、それ以外は全て
八音節行で二行連句)で、「敬虔な想いと不意の叫び」部の
十九篇が終り、『甦ったタレイア』の総締め括りになるの
が、ヴォーンの残した最長篇詩、一八四行の「ダフニス
哀歌調牧歌」であるが、それは次稿で扱いたい、前稿で拙
訳のみを提示するに留めた「世界」と「蜜蜂」を改めて取
り上げることと共に。

*

この詩集は既述のように、作者自身が編者でなかったせ

いであろう、冒頭部に作者の親しい知人四人が各々一篇ずつヴォーンに捧げた四作品が掲載されている。彼はどのよう
に看られていたろうか。本稿の最後に、その四篇を紹介しよう。シルレス族とはローマ帝国支配の昔、タキトウスによつてそう名付けられた古代ブリトン地方のケルト部族で、ヴォーンはその裔を自称していた。

シルレス族の裔^{すゐ}びとヘンリー・ヴォーン氏に、以下の及び以前の詩篇⁽¹⁾について

To Mr. Henry Vaughan the Sturist: upon these and his former Poems

もし私が〈一般大衆〉を讀んで それ故

機智と明敏さに〈反感〉を抱いてその〈宿命〉に固執したとしても〈世間〉が認めてくれる望みはあろう

〈無知〉であるのは良い〈性向〉だったと、

それでもあなたの晴やかな空想の〈光線〉がそこに微か

も見えたら

私は心を入れ換えていたか 言ひ訳の必要はなかったことにならう。

今後あなたの〈詩神^{ミューズ}〉が〈誕生〉するたびに それ

この〈時代〉の犯すあらゆる〈罪〉の償いをしてくれる筈

だから。

まずあなたのアモレット⁽²⁾が光り輝き、あなたによつて二度

冠を戴^おせられた、

一度はあなたの〈愛〉により、次はあなたの〈詩〉によつ

てそこでは

あなたは両者の最良の〈統治者⁽³⁾〉として分配する、

〈機智〉に包まれた〈真理〉と〈無垢〉なままの〈愛〉を。

だからどんよりした〈恋人〉はここで学べるわけ、

澄んでいない〈泉〉は甘美である筈はないと。

あそこではユウエナリス⁽⁴⁾があなたに再生されて表明する

人間の〈喜び〉の平板さ加減と、その〈心遣い〉の粗野ぶ

りとを、

そして賢明にも〈世間〉を激しく非難する、

彼らはその荒廢にしかるべき対価を払うべきだと。

しかしあなたの神聖な〈詩神〉が愛用の〈鶯ペン〉を

シオン⁽⁵⁾の〈丘〉の〈風景〉を描くの⁽⁵⁾に転ずると

他のものは何もかも彼女に、あるいはあなたに、価値がなくなつた

同じように私たちは殆どその《偶像崇拜》を讀めるのだ。

余程の野蠻な《胸》でもなければ 拉致されて見つけ損な

つたりするだろうか

あのような《小箱》に秘藏される貴重な《宝石類》を？

あなたは（大きすぎて見たり数えたりできない）喜びで満

たされて

そこから降りて来た、あの《山》からのモーセのように、

そして率直ではあっても疑いの余地のない畏敬の念で

《韻文》が《法律》であったあの《黄金時代》を復活させ

たのだ。

私たちを教え導きながらあなたは《名声》を確かにされた

だから何もものもそれを妨げられない、私の名前以外は。

いや、私にはあるのです、あなたの名前の間近にあれば

私の名前には屑が失くなり、だんだん洗練されるのではな

いかという希望が。

健やかでいて下さい！ 誤りに気付いた《世間》が同意す

るまで

《使用》、《力》、もしくは《飾り》についてのあらゆる《真

理》は

あなたによってしかるべき《調和》を備えて示されるのだ

ということに、

《世間》全体はまず、数によって作られているのだから

あなたの《詩神》がもたらす魅力に富む厳格さから

学びましょう！ 厳肅な事柄にしか楽しみはないのだと。

オリンダ

[M・六一七—一八]

訳注

(1) この作品は、オリンダ「訳注(6)参照」の詩集の一六
六四年、六七年、七八年、及び一七二〇年の各版に収録さ
れている[M・七五六]

(2) この二行は、アモレット (Anoret) が実在の人物、お
そらくヴォーンの最初の妻キャサリン・ワイズだと暗示し
ている[M・七五六]

ヴォーンの最初の詩集(一六四九年刊)には、アモレッ
トに捧げた詩六篇「次稿で扱う」が収録されており、『燧
石』にはキャサリンへの追悼詩「記九」明るく若々しい
光よ！「小考(九) 21-22」が在った。

(3) the best of Unions 即ち次行の《真理》と《愛》との。
ハッチンソンは、この句はヴォーンとキャサリンの結婚に
言及していると示唆する[H・二一六]、説得力はないが

[M・七五六]

(4) *Juvenal* (Decimus Junius Juvenalis, c67-c130) ローマの諷刺詩人、人間のする事全てを対象にした長短一六篇の作品を五巻の『諷刺詩集』で出版した。その後の西欧の諷刺詩の伝統の始祖となり範となった。ボワロー、サミュエル・ジョンソンが範とし、バイロン、ルソー、ユゴー、フロベールが愛読した。

ユウェナリスの第一〇歌をヴォーンは英訳して最初の詩集に「M・一七」収録した。

(5) *Sions Hill* エルサレムにある丘、ダヴィデが宮殿を築き、その子ソロモンが神殿を建て、その後長くユダヤ人の宗教・政治の中心になった。

(6) *Orinda* Mrs. Katherine Philips (1631-64)、ウェールズ西部の都市カーディガン (Cardigan) 在住の、機智に富んだ詩人として尊敬され、短期間文名を挙げた “the Matchless (無双の) Orinda”. 初期の注釈者はヴォーンとオリンダの親密な友情を想像したが、二人の間に交わされた詩(彼からの二篇と彼女からの一篇)「この作品」を証拠とする限り、文学上の知人以上ではなさそうだ「RA・四九九」

冒頭からなかなか込み入った表現によって、「貴重な〈宝石類〉」を積み重ねながらヴォーンの書き続ける「厳粛な事柄」に「世間」が「楽しみ」を見い出せることを希っ

での、ヴォーンをよく知る人にも可能な心暖まる佳品ではなからうか。十音節二行連句三八行の詩。

ヴォーンがオリンダに、直接、間接に贈った詩も三篇残されている。いずれ取り上げよう。

彼の学識高き友人シルレス族の裔ひとヘンリー・ヴォーン氏の巧妙な詩について

*Upon the Ingenious Poems of his Learned Friend,
Mr. Henry Vaughan the Silurist*

見事に企てられたものだ！我ら〈市民の憤怒〉を〈韻文〉で魅了し、〈鉄の時代〉に〈月桂樹〉を植えるとは。⁽¹⁾

しかしマルスが大層従順な〈魂〉に銅を着せて

〈愛〉と〈詩歌〉を制御させようとするのだろうか？

そうだ、勇敢なテュルタイオスよ、⁽³⁾我らが昔読んだようにギリシャの〈軍隊〉は、彼がいそいそ形作ってし向けたように

彼の高揚した〈詩行〉へと行進してゆき、闘ったのだ

彼が書いた時のあの直観と憤怒をこめて。

彼が低調に陥り出すと、彼らは窮屈な思いのまま退却する

のだった、

溫和に穏やかになって、各々の激しい熱を和らげたのだ。
それ程の〈魔術〉は〈美德〉のうちだ！見聞きするだろう
若いテュルタイオスもまた、自らの甘美な説得力のある
〈歌〉は我らの〈精神〉をどのようにも導けるし動かす
るのだと

あらゆる〈冒険〉へ、〈戦争〉へにしる⁽⁴⁾、〈愛〉へにしる。

だからヴェイルで覆おう 聡明なエテシアを、あの選び抜

かれた〈彼女〉を、

マルス⁽⁶⁾（ティマンダーの友人）が、彼の〈競争相手〉にな
らないように。

これ程美しい〈妖精〉なら〈詩神〉によってすっかりすっ
きり装われて

〈北方〉を暖めて 凍てついたゲエテ人を溶かせそうだ。⁽⁷⁾

神学博士 トマス・パウエル⁽⁸⁾
〔M・六一八〕

訳注

(1) 冒頭の二行は、この詩が、ヴォーンンの詩の集成が内乱中

に、おそらく一六四〇年代後半に出版されるようにとの意
図で書かれたことを示すもの〔F・三六一〕

(2) *Mars*、古代ローマの軍神、ギリシャ神話のアレース
(Ares) に相当する。

(3) *Tyrtaeus* 紀元前七世紀のギリシヤはスパルタの詩人、
その詩はスパルタ軍の精神に著しく影響を与えたと言われ
る〔F・三六一〕

(4) もしヴォーンンが戦争への憤怒を煽る詩を書いていたら、
それらは生き残らなかつただろう。そういう詩で破棄され
たものがあつたかも知れない〔F・三六一〕

(5) *Etesia* この詩集の前半に、エテシアに捧げた詩が七篇
ある〔次回に取り上げる予定〕。この名前は、ヴォーンンの
英訳した、ローマの哲学者・政治家ポエティウス (Ancius
Manlius Severinus Boethius, c. 480-524 AD) の有名な著作
『哲学の慰め』の中の詩の一篇〔M・八一〕に出てくる
「エテシア季節風」*'Etesion wind'* 「エゲ海一帯に夏季に
吹く北風で、ギリシヤ特有の夏の青空をもたらす」に由来
する〔RA・五一四〕

(6) *Timander* エテシア詩の最初の一篇の標題に「エテシ
アに（ティマンダーに代って）最初の一瞥」と出てくると
ころからマリラは、ヴォーンン自身が詩人としての自称にし
ている証拠だというが、それへのマーティンの疑いは多分
正しいだろう。

マルスに関連づけてテイマンダーを持ち出すのは、彼が作者パウエルとヴォーンの共通の友人である一兵士であるかのように思われる〔RA・六六九〕

(7) *Gete = Getan = Getae* の一員。東部ブルガリア、ドブルジア、ワラキア、モルダヴィア、及びベッサラビアに略相当する地域に居住していた古代民族。ダキア人とゲエテ人とが二大構成員である北方トラキア〔バルカン半島東部の古代地域〕人の全て〔Webster, 3rd ed.〕

(8) Thomas Powell, 1608-60. 一六三五年以来 Cantref の Rector (教会主管者) であり、オックスフォードのイエズス学寮のフェロー。ヴォーンの長年の年長の友人〔M・七〇四〕。ヴォーンは彼に五篇の詩 (M・六〇一六一、M・九三、M・六二二—二四、M・六三四—三七、M・六六九) 〔本稿前掲四一ページ〕を捧げている。

魔術のように巧妙な詩だとヴォーンの作品を評価し、如何にも彼の友人らしく自分自身も高い学識を自ずから表した機智に富む讃歌になつていよう。十音節詩行二行連句一八行の詩。

『甦ったタレイア』の巧妙な著者へ

To the ingenious Author of Thalia Rediviva

頌 一

昔〈吟遊詩人〉師諸氏が〈宿命〉⁽¹⁾ についての楽しい間奏曲を心して歌つたのに対し、

あなたは〈自然〉のありふれた〈術〉⁽²⁾ が作つた代々の陰を受けて

そこから自らの〈詩神〉⁽³⁾ を思うさま揺らしたので、彼女は〈銀河〉へと前進してゆく、

そこでは異彩を放つかウリーと先刻の彼女は手に手を取つて優雅な〈調子〉⁽³⁾ で動いてゆく。

我ら卑屈に振る舞う〈必滅の人間〉は下を凝視⁽⁴⁾め無駄なのに長いことかけて知ろうとする

彼女の素晴らしい道筋を、彼女の素晴らしい飛翔ぶりを無駄なのだが、ああ何たること！我らは摸索する

無駄なのだが、我らは自分の現世の〈望遠鏡〉⁽⁴⁾ を使う、我らは間に挟まる夜によって盲目にされているので、

あなたの〈鷲・詩神〉⁽⁵⁾ だけが直面⁽⁴⁾ 出来るのだ
競走さなかの火となった〈獵犬たち〉⁽⁵⁾ に、

その間各々異なる歩調で我らは試みるのだ

彼女の裾を高くからけて、彼女のお供をしよう。

二

あの 声高く調和の取れたマントヴァ人は⁽⁶⁾

かつて世界を魅了したが、ここにはアスクの〈白鳥〉がいて

衰退に向かう年月にあつて歌を奏で

〈時〉の最後の名残りに挑戦する。

時代は各々どんどん過ぎてゆき間もなく尽きる、

彼らには我ら同様それぞれの〈墓〉がある、

時は過ぎ去つたもの全てと更に多くを呑み込み

ながらも 時は永遠の中に呑み込まれている、

これは〈詩人たち〉が見る唯一の利益だ。

そこではあなたの勝鬨を挙げる〈詩神〉が威風堂々乗り出

してきて

〈鎖〉を引き込みながら〈宿命〉を貪り食らう

クラウディウスの聡明な〈不死鳥〉⁽⁷⁾である彼女が

持つてくるのだ

あなたに不滅の捧げ物を、

私を慎しく助けてくれる〈詩神〉は

自らへの尊敬と付き添いも拒みはしない、

彼女は〈群衆〉の間に割り込んで

自らが音高く拍手しようとする声援に 加わるのだ。

三

もはや私に言わないでくれ 〈自然〉は厳しいな⁽⁸⁾と

君 偉大な〈哲学の徒〉よ!

ほら 彼女はここに広大な〈大蔵省〉を置いたよ。

もはや私に言わないでくれ 彼女は既に⁽⁹⁾

消費されただけの大量の物を送ってきたなどと。

ここには広大なアメリカが背後に控えており⁽¹⁰⁾

それは偉大なシルレス族の裔にしか見つけられないのだ。

最終版の〈自然〉が最上だった、

残りの全てと同じく大きく富んでいた

だから我らはここに認めるのだ

〈機智〉のもう一つの世界を。

粗野だつたり野暮だつたりする空想も ここでは

独自にこつこつ励む〈読者〉を引き留めはしないし⁽¹¹⁾

海岸はいつでも澄み切っている、彼がどこへ行こうとも

造詣こそが タレイアが彼を静かに導く道なのだ、

どうか彼女が長生きしてあなたの神聖な頭が花輪で飾られ

るように、

彼女がこうして死者から幸運にも甦ったのだから。

N・W⁽¹²⁾ オックスフォード イエズス学寮

[M・六一九—二〇]

訳注

- (1) Reverend Bards "bard" は古代ケルト族の吟唱「遊」詩人。パーズ師なる固有名詞のように見せかけて始める。
- (2) thou giv'st thy Muse her swing 'swing' = free scope (OED swing sb's). 「思うがまま能力を揮わせた」の意 [RA・六四五]
- (3) Abraham Cowley (1618-67). 形而上派詩人。その作『愛人』*The Mistress* (1647) の恋愛詩、未完の叙事詩『タウィテの歌』*David's* (1656) 及び『ピントロス風頌歌』*Pindarique Odes* (1656) は、文学その他の話柄を論じた評論と共に、生前彼に極度に高い評価をもたらした [F・三六三]
- (4) *Thine Eagle-Muse can only face* 々の詩から四番目に収録されている「鷲」*The Eagle* の一―一二行目「あなたは澄んだ〈高み〉で最も高い〈大気〉の中で〈太陽に直面し〉」を参照 [RA・六四五]
- (5) *The fiery Coursers* 太陽の二頭立て二輪戦車 (Chariot) を引く馬たち。
- (6) *Mantuan* ウェルギリウスのこと。マントヴァはイタリアのロンバルディ州東部の都市、ルネッサンス文化の一心地で特にウェルギリウスの生地として名高い。
- (7) この詩集に収録されているウォーソンの翻訳 "*The Phoenix out of Claudian*" [M・六五六―五九] への言及。
Claudian = Claudius Claudianus. 紀元四世紀後半にギリシャ語とラテン語の両方で書いたが、彼が最大の成功を取めたのは皇帝ホノリウス (Honorius, 384-423) とその將軍・政治家ステイリコ (Stilicho, 359?-403) の宮廷詩人としてである。彼の最も有名な作品は未完の『プロセルピナの凌辱』*Rape of Proserpine* で、後の古典詩人たちの水準に達し、彼らの文体上の多くの趣向を用いている [RA・六七五]
- (8) Tell me no more that Nature is severe... Philosopher おそらくホブズ [Thomas Hobbes, 1588-1679] は彼は言った、「自然の状態での人間の生活は、孤独で哀れで扱い難く粗野で短いものだ」『レヴァイアサン』*Leviathan* (1651) I. 13. [RA・六四五]
- (9) Tell me no more... she is spent 々の二行。一七世紀には一般に「〈自然〉とは衰退の状態にあると考えられていた。ハリス『統一性は全て去った』V. Harris, *All Coherence Gone* (1949) 参照 [同]
- (10) behind = in reserve (OED behind 4) [同]

(11) stay = detain, hinder (OED) stay v. 20) [同]

(12) N. W. Jes. Coll. Oxon おざらく、猷辞の署名者ジョンの弟ナサニエル (Nathaniel Williams) で彼は一六七二年に一五歳でイエズス学寮に入学をオックスフォード大学から許可されている。一六七九年に死去 [H・二一五]

この二十代初めに夭逝した作者、まるでヴォーン自身のように誠に「巧妙な著者」ではなからうか。正に類は友を呼ぶだ。

第一連一八行、第二、第三連はともに一七行で総数五二行の詩。行頭の出入りが直ちに示唆するように凝った姿形で展開される。各連とも二行連句(二行ずつ対で押韻してゆく詩型)だが、その中に、第一連には a b b a 型の四行(二一―一四行目)が、第二連には a b a b b 型の五行(五一―九行目)が挿入されており、第三連は冒頭の三行が押韻した後が二行連句になっている。三連とも一、二音節行で最後を締め括るが、各連の詩行の音節数は表示のとおりで、詩型も集中最も複

行数	三	二	頌一	音節数
5	3	0	2	6
16	3	8	5	8
6	2	1	3	9
22	8	7	7	10
3	1	1	1	12
52	17	17	18	行数

雑精妙な作品である。

我が敬服してやまぬ友人、シルレス族の裔びと

ヘンリー・ヴォーン氏へ

To my worthy Friend, Mr. Henry Vaughan

the Sillurist

御覧 君は何者だったのか！如何なるプラトーン風の過程で 最初の若い頃の〈栄光〉に今輝いているのか！それとも君の〈詩神〉のせいでのこの〈回帰〉は起きておりかつて君に靈感を吹き込んだ彼女が 今甦らせており君に取り戻しているのだ 時が君の〈詩歌〉にとつて滑らかにと整え、君の〈押韻〉が磨きをかけた あの〈黄金〉時代を。
いや 君にだけ彼女はあのような幸せな変化を運んでくるのではなく 昼間のように惜しみなく彼女が輝かせる〈読者〉なら誰にでもであり彼女は彼を君と同じようなものにして永遠に君のものにするのだ。

それで最初のうち 君の手引きの始まりで

〈蝕〉が見え、苦難が〈至高の權威²〉を磨くが

そこで君が ものの見事に風を通してくれたので

我らはその陰の中に光彩を最もよく読み取り

あの屍衣の中で我らの〈君主権〉が一層強力になっている
のが分る。

そこで〈雷光〉がその夜と雲³の中からまばゆく照り映える

そこで最初の〈光〉そのものが現れる 彼の〈王座の〉

〈真黒〉と彼の〈別墅⁴〉の〈闇〉を照して。

誰が君のお伴をしたり一緒にいるのを拒めるだろうか

君が次に魅力ある呼び掛けをして無理に引き離すまでは、

もしそれが 力も喜こんで揮うのでなければ激しくは

ならないのだからと 我らが腹を立てられる力ならば、

気付かぬうちに君の〈驚⁵〉が我らを上方へと運んでゆく、

〈暴風雨〉やあらゆる嵐めいた〈大気〉が及ばぬ上へまで

我らは聡明な人々を擁する燦然たる〈世界〉と出合つて

この小さな〈全て〉を足許に置き去りにするわけだ。

しかし今や、その楽しみは余りに大きくて口に来れないし

我らには、〈使徒たち〉が自らの追放を栄光に満ちたもの

にしようと思ひ定めたあの神聖な〈山〉の

ような所に住むしか他にすることがない。

それでも知つて納得するしかない 君の巧みな〈手法⁶〉が

穏やかに我らを再び我が家に帰り着かせてくれるのだと、

その下降によつて君の以前の飛翔は暗に示されるのだ、

君の恍惚状態だったのであり 君の誇りではなかつたと。

それでここではあの賢明な〈詩神〉は何と見事に身を処し

自らの歌をあらゆる〈状景〉にびつたり合わせるのか！

〈宮廷〉の〈騷擾⁶〉、〈戦争〉の血塗れの花冠、

〈市場〉の〈詐欺〉、〈法廷〉の喧噪、

いや、生活そのものを君は非常に巧みに表現するのだ

生活の空ろな〈喜び〉と現実の〈空虚さ〉という姿で、

ドーリア人の〈吟遊詩人〉は 興奮させたり

死への強い欲求を掻き立てたりは決してしなかつたのだ。

君が他にもつと弱い〈魔術〉を使つても

我らが君の名高いエテシア⁸を惹きむ思ひに変わりはない、

あそこで君はあのような〈人格〉に羞恥心を与えるので

嫉妬もこのウエスタ⁹の〈貴婦人〉には取立て近づかない、

だから輝かしい〈最盛期〉を不満に思う〈観念〉などなく

いづれも何事もなくこの〈永遠の詩人〉の中で輝いている。

喜々としてアッシリアの〈不死鳥〉が今や取り戻す
君から自らの〈大羽〉⁽¹⁰⁾のこの最後の賠償金を、
彼は別のもっと驚嘆すべきものようだ

〈鳥冠〉⁽¹¹⁾は一層輝かしく、〈翼〉は一段と強くなつて、

香料の〈壺〉の中で来たるべき〈運命〉に耐えて、

〈殉教〉のあらゆる危険は乗り越えて 不滅で。

心配それでも風変わりでもなく君は逞しく

君のカンブリア⁽¹²⁾の辺鄙な里から 冒険に乗り出す

この上なく見事に君の〈詩神〉は あの聳え立つ〈断崖〉

から空高く

飛び上り、大胆に自慢のケルビムの翼を展げるのだ。

それでメンフィスの〈賢者〉⁽¹³⁾が予報するその都度の

〈空〉と〈紺碧の宇宙〉と語り合おうとする時は

いつもの星明かりの〈ピラミッド〉に登つて そこで

澄んだ預言者の影響力を思うさま吸い込むので

すつかり〈安らかに〉なり、うっとりして快活に

探り当てるのだ 〈天空上天の〉大量の〈神秘〉を、

降りたくなくなつて、あるいはもつとナイル河の

豊富だが鈍く霽の籠つた岸辺を知りたいと思つて。

I・W⁽¹³⁾、オックスフォード 文学博士

[M・六二〇—二二]

訳注

(1) Retrieve = return (OED retrieve sb 2) [R・A・六四五]

(2) Majesty の詩集に収録されたヴォーンの二番目の詩

「変装王」『The King Disguis'd』 [M・六二五—二六] 参照。

「ジョン・クリーヴランド氏が自らの詩を書いたのと同じ

頃の作」と断り書き付。一六四七年一月に印刷された。こ

の王とは、一六四六年四月二七日に召使姿に変装してオッ

クスフォードを脱出したチャールズ一世 [F・三六九]

(3) its night and cloud = its cloudy night 「曇つた夜」(二

詞一意) hendiadys. ヴォーンの好む修辭の一。

(4) So the first Light himself... Pavilion おそらくヴォーンの

詩「夜」[小考(七) 35 37]への相補的な言及であるう

[R・A・六四五]

(5) Eagle この詩集に収録されたヴォーンの三番目の詩

「鷲」『The Eagle』 [M・六二六—二七]への言及。この詩

については次の瞠目すべき卓論がある。松崎毅「ルーパー

ト王子と「鷲」—ヘンリー・ヴォーンの世俗詩と検閲をめ

ぐる論考—」〔十七世紀と英国文化〕金星堂、一九九五年、

一七二一九一)。

- (6) *Riot of Courts, ... the Bar* への二行は、一六七八年のこの詩集『甦ったタレイア』のどの詩とも実際には調和しない【M・七五六】

- (7) *Dorian* 紀元前十二世紀頃ギリシャに侵入し、ペロポネソス半島を征服した、有史以前のギリシャ人の四大種族の一。ヴォーンをドーリア人吟遊詩人に譬えた。

- (8) *Etesia* 前掲パウエルPaulの詩の訳注(5) 参照。

- (9) *Vestal* 古代ローマの炉の女神ウエスタ(Vesta)の祭壇の聖火を守った六人(それ以前は二〜四人)の処女に特有の純潔な。

- (10) *Plumes* ヴォーンW. H. Audenの訳詩の一篇に言及。前掲ナサニエル・ウィリアムズJohn Williamsの詩の訳注(7) 参照。

- (11) *Cambria* はウェールズの中世の呼び名。ウェールズ中部を北から南へ延びている低い山脈は *Cambrian Mountains* (最高峰は *Aran Mawddwy*, 891m)。

- (12) *the Sage of Memphis* メンフィスはエジプトのカイロ南方のナイル川に臨む古代都市で、古王国時代(c.2900-c.2263b.c.)の首都、現在は廢墟。

古代エジプトは占星術師—哲学者の活動で有名だった。実在の人物のどの賢者を作者が念頭に置いたかは不確か【F・三五六】

この賢者はインホテップ (*Imhotep*, c.2600b.c.) 『死後神格

- 化されたエジプトの医師・建築家」【RA・六四六】
(13) *John Williams* への詩集の編者。

ああ、持つべき者は自分に本当に相応しい友人だ、と一読思わず嘆息させられる作品ではあるまいか。さすがはこの詩集の編者として余人の遠く及ばない適任者だったと納得させられる、十音節詩行二行連句六六行の詩。

甦った、いや、甦らせられたタレイアの残りの声を更に聞いてみたい。記すまでもないだろうが、タレイア「タライア」〔富める、十分な〕の意は、ギリシャ神話中の、学問・芸術を司る九人の女神(ムルサイ)の一人で、喜劇と牧歌を担当する。別には、「壮麗」のアグライアー (*Ag-lata*)、〔喜び〕のエウプロシユネー (*Euprosyne*) と共に美と優雅の女神三姉妹の一人で、「花盛り」の象徴とされる。

*参考文献

本誌『成城文藝』第二二一号(二〇一〇年六月)の拙稿末尾(二四—三〇ページ)を参照されたい。ここには本稿での直接参考文献のみ挙げる。尚、本稿中、「小考(一)」

- [小考 (十三)] は、本誌既連載の拙稿(第一九九号〜第二一一号)を指す。
- [続小考 (二)] 「補遺と増幅」ヘンリー・ウォーン、『火花 散る燧石』以後の「成城文藝」第二一五号、19—47、二〇一一年六月。
- [C] Chambers, E. K., ed. *The Poems of Henry Vaughan*, *Sirist*. Introduction by H. C. Beeching. 2vols. London and New York: Charles Scribner's & Sons, 1896.
- [F] Fogle, French, ed. *The Complete Poetry of Henry Vaughan*. New York: Doubleday. 1964; New York University Press, 1965.
- [H] Hutchinson, F. F. *Henry Vaughan: A Life and Interpretation*. Oxford: Clarendon Press, 1947.
- [J] Leishman, J.B. *The Metaphysical Poets: Donne, Herbert, Vaughan, Traherne*. Oxford: Clarendon Press, 1934.
- [JH] Lyte, H. F., ed. *The Sacred Poems And Private Ejaculations of Henry Vaughan*. Boston: Little, Brown and Company, 1854.
- [M] Martin, I. C., ed. *The Works of Henry Vaughan*. Oxford: Clarendon Press, 2nd ed. 1957. 本稿の底本。
- [Mv] Martila, E.L. *The Secular Poems of Henry Vaughan*. Uppsala, Harvard and Copenhagen, 1958.
- [RA] Rudrun, Alan, ed. *Henry Vaughan: The Complete Poems*. New Haven and London: Yale University Press, 1976.
- [W-J] Wilcox, Helen, ed. *The English Poems of George Herbert*. Cambridge: Cambridge University Press, 2007.